

寛永諸家譜

清和源氏四冊之内  
義家流之内為義流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186	(	19)
函號	76		1

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

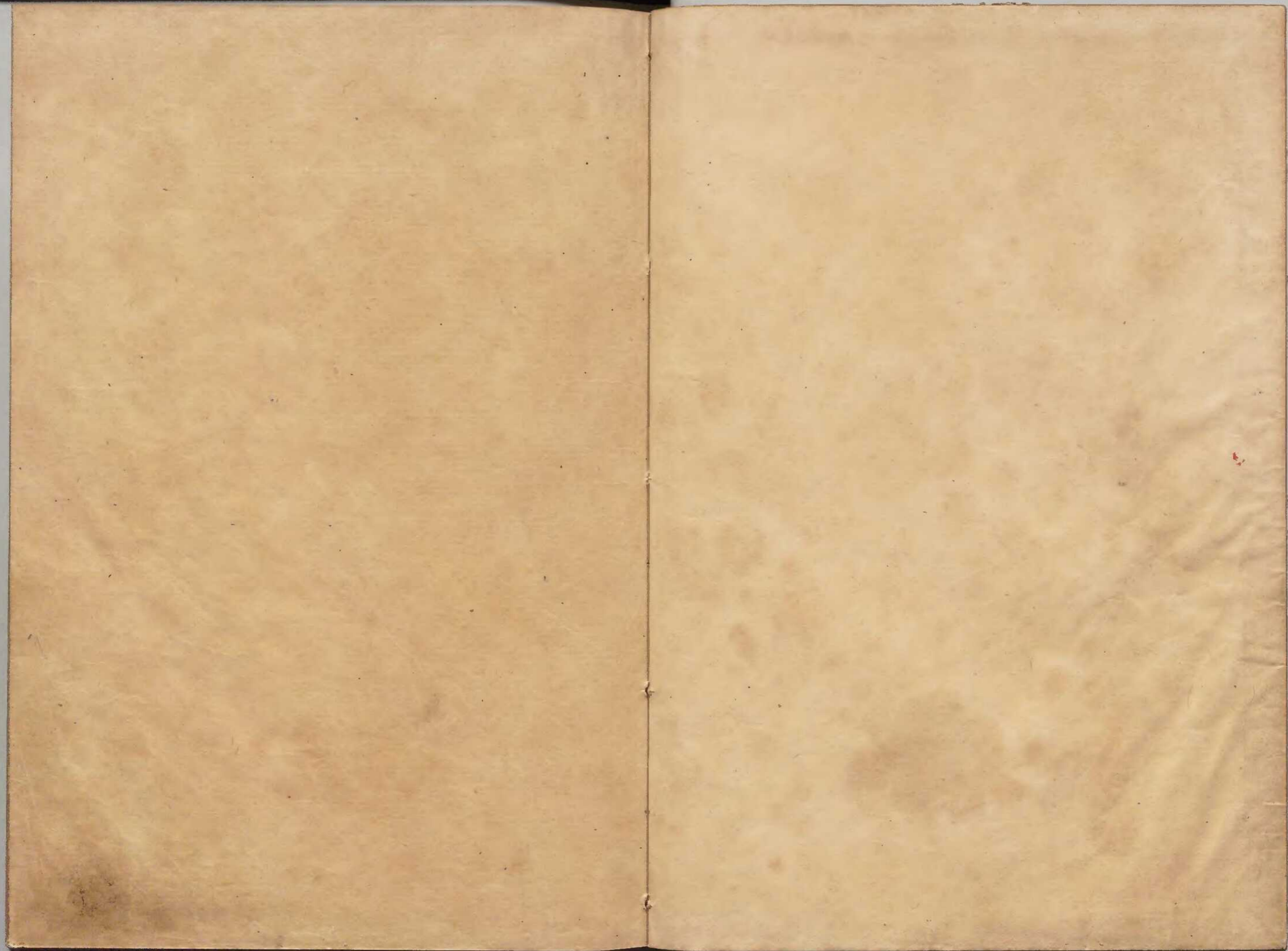
Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007. TM: Kodak









鴻津

寛永諸家系圖傳

清和源氏

義家流

為義流

鴻津

丙一

淺草文庫

● 為義

六條判官



義朝

た馬頭

頼朝

正二位

大納言

右大将

征夷大將軍

頼家

従二位

た左門將

征夷大將軍

公曉

惠禅師

若文別當

實朝

右大臣

左大将

征夷大將軍

忠久

左大臣

右大臣



尾瀨門尉判官 菅原俊守

治承三年 延生

薩摩大隅日向の三ヶ國を領せ其  
外越前美濃伊豫信濃の内又粗是  
を領知せ

家傳といふくげゆめは合判官結貞が

妹丹後乃つがの頼朝つり寵愛せし

てししむもしる頼朝の室平政子

あれを秘し右り丹後の局そのつこ

りたのん事をおうれてひうたにとあよ

おしお橋判官者よつと和しりく

曉宿よりあられも里人好らけ

対り大の面ありて田方んあしう

奇の産の心まごけきば社頼のう

つた乃うらよ入てのうと石のこよ

うばきよりと対杭火の暗夜とて

はましくつあよ男子とうめりこし則志

久なりのいまにいふまて其石を産石



也種々これより信者未社。總行と  
勅使とけいご。其社の執火。この神に  
そすけかりの光。よつと。總行橋前と  
長と。清津家。あとも。つと。嘉瑞と  
と。信事。又これ。あがり。も。母後局  
志。けん。く。冥。東。よ。く。つと。惟宗。氏。部。人。獨  
廣。言。り。塚。と。これ。あ。り。忠。久。も。又。惟。宗。氏  
と。あ。り。す。志。れ。ども。冥。頼。朝。の。の。子。な。り  
建。久。七。年。一。月。一。日。忠。久。十。八。歳。と。て

薩州。下。向。の。ま。い。ふ。京。都。よ。り。あ。り。て  
を。傳。教。す。揚。と。これ。あ。り。忠。久。も。又。惟。宗。氏  
頼。朝。郷。に。め。く。十。文。字。と。製。し  
て。旗。幕。に。紋。や。く。忠。久。と。あ。り。す  
より。て。代。り。あ。り。す。と。相。傳。と。旗。に。白  
く。と。其。中。に。十。文。字。と。墨。く。幕  
の。紋。の。し。ら。ん。の。地。に。十。文。字。と。白。く。と  
嘉。祿。二。年。三。月。二。十。一。日。卒。と。享。年。四  
十。八。法。名。法。佛。淨。光。明。寺。と。号。す



能直

大友の先祖

忠孝

若狭守 三方は先祖なり

忠久一腹の弟 若狭守津と号す

兼久乱の河内東へとたりて宇治

川にて戦死す

忠経

左邊門尉

兼久乱のとき京方とありて宇治

川にて討死

忠義

三郎若狭守 修理亮 大隅守

くつめれ名忠時

建仁二年 延生母の畠山重忠息女

文永元年 卒して六十三歳



忠綱

法名道佛

浄光の寺と号す

周防守

越前あちかの湊津

忠宗

豊後守

大吏判官

忠宗

多々た法守

大吏判官

知覧ちらんの祖

忠秀

常陸ひらたけ守

大吏判官

宇治うぢの祖

忠继

五郎ごろう左衛門尉

忠直

三郎さんろう左衛門尉



泰忠やすしん

ら島左衛門尉

宮里みやざとの祖う

時忠ときしん

女子むすめ

時忠

孫六郎

左衛門尉

光忠みつしん

左京進さきやうしん

忠連ちゆれん

下野守しもねのしゅ

忠継ちゆけい

式部しきぶの浦のら

山田やまだと号なす



忠真 ちゅうま

宗久 すねひさ

式部の補

式部の補

久經 ひさつね

下野守

左衛門守

修理亮 しゆりりやう

しづめはなは久時 ひさとき

嘉禄元年 誕生 かろくげんねんたんじゆう

法名道忠 ほうなみちちゆう

淨元明寺と号す じやうげんめいじとごうす

高久 たかひさ

大炊助 おほいのすけ

信濃中泊と号す しんのうちゆうわくごうす

忠康 ちゆうやす

式部の補 しきぶのたすけ

忠作 ちゆうさく

左衛門尉 さゑもんゑい

久時 ひさとき

大炊助 おほいのすけ

阿蘇若光祖 あそわかつひら



忠経ちゅうけい

五郎

久氏ひさうぢ

七郎

女子

三浦家村の妻

宗長むねなが

彦二郎

大京進おほきやうしん

給物の祖

忠継ちゅうけい

三島共清

忠光ちゅうこう

五郎右衛門

町田の先祖まちだのせんぞ

俊忠しゅんちゅう

侍従房しじゆうぼう

久兼ひさかね

五郎

伊集院と号すいじゅういんとごうす



忠宗

下野守

建長三年誕生

文學歌道をすしむ

風を海なる此川の夕暮り

ふけ涼しひくし此歌

續子載集雜の上此歌とのせく

惟宗忠宗とて名を記す

此冊に礼氏日削り下野守とあり

其事ありなりあるに忠宗志布志大慈

寺を寶地庵とて仁礼を誦して國家と

志川と

正中二年十一月十二日卒七十五歳

法名道義 淨光の寺と号す

忠長

忠長三郎 高島村

始の名は久長 伊弉乃先祖



忠久乃幡同鏡同細切と相傳ふ  
法名道意

久清

大京進

始の名久

法名道惠

忠親

下野守

法名道一

久氏

三郎忠親

昔氏將軍此村東寺少く廟を

そは其其廟の替てよ清高のち

丸のふら清代をいふはわて

めそは此とをいふ葉のこれ

久氏これを本園りつはて今

兄下野守忠親よりとこれ



某 ミナ

竹青丸 たけあお

久義 ひさよし

法名道榮 ほふなみちさか

久親 ひさちか

下野守 しもとのり

親久 ちかひさ

近江守 おみのり

久章 ひさあき

加賀守 かがのり

久次 ひさつぐ

左馬頭 さまたて

十忠 じゅうちゅう

遠江守 とほのり



久國

石見守

勝久

法名道恕

教久

法名道芳

某

大安丸

法名道賢

十六歳して早世して伊作氏より

子久

貞久

上総介

文永六年誕生

親應二年七月三日卒八十三歳

法名道鑑 淨光の寺と号す

忠氏

次郎左衛門尉

下野守

忠氏



和泉と号す  
親應三年七月二日死去

忠光

二郎左衛門尉 作多也号す

忠直 氏儀 久親

時久

甲郎左衛門尉 新納と号す

法名道宏

久有

近江守

資久

六郎左衛門尉 安藤守 松山と号す  
玄丸の祖

資忠

次郎左衛門尉 尾張守 小郷と号す



久泰 ひさやす  
末弘の祖 すえひろのそ

九郎左衛門尉  
石坂の先祖 いしざかのせんぞ

始義久 はじめのよしかず

頼久 よりひさ

孫三郎 川上と号す

親久 ちかひさ

上野女 うののめ  
法名自法 ほんなみづみ

家久 いえひさ

上野女 法名道哲 ほんなみちてつ

宗久 むねひさ

三郎左衛門尉 大吏判官  
十九歳して早世 法名久阿 ほんなみひさあ

仲久 なかつひさ

法五位下 大吏判官 左衛門尉



上総二郎

法名道貞

伊久これのこ

上総女このま

法名久哲このま

守久このま

太史判官

播磨守このま

忠朝このま

山城守このま

久照このま

久世このま

上総女このま

法名惟馨このま

某このま

大令郎丸このま

永享元年貞幸このまのおおこのま目守このま

時このま十二歳このま法名大義このま



久安ひさやす

三郎さんらう左衛門尉ざゑもんゑい

忠安ちゅうあん

始良あきら三郎さんらう左衛門尉ざゑもんゑい

光久ひさひさ

三郎さんらう左衛門尉ざゑもんゑい

治久ちひさ

小次郎せうじらう

祐久ゆうひさ

碓山うすやま兵部へいぶ少輔せうぶ

久彦ひさひこ

左衛門尉ざゑもんゑい

久次ひさつぐ

又九郎またくさむら



忠親

小次郎

討死

氏久

三郎左衛門尉

修理亮

陸奥守

越前守

嘉暦三年 誕生

馬との名人なり馬書十八ヶ条

と撰み此とれたる昌山法部と追泊守

嘉文元年閏五月四日卒六十歳  
法名 鈴岳玄久

光久

四郎左衛門尉

氏忠

但馬守

元久

陸奥守



貞治元年 誕生

義持將軍 此と云元久四十八歳

上洛と應 永十七年九月より下

同十八年八月六日卒 五十一歳

法名玄忠 道号恕翁 福昌寺と号す

仲翁和尚

福昌寺三代の住持

女子一人

久豊

陸奥守

修理亮

永和元年 誕生

川邊におおく重代の古りあり

刀お侍と使者に阿羅石塚なり

を修取ものい山田酒匂なり

寛永二十二年正月二十一日卒 六十一

歳 法名義天 阿忠恵院と号す

女子一人



忠國

修理亮 陸奥守 始の名貴久

寛永十年 誕生

文明二年正月二十日卒六十八歳

法名香登道号大岳 深園院と号す

用久

義庸先祖

季久

豊後守

修理亮

越後守

有久

出羽守

文明八年九月十二日 日洲と股小

山く討死

豊久

伯耆守

日洲飯肥よて我死

僧一人



女子四人

友久

又七郎 相模守 右馬頭  
法名天勇 常珠寺と号す

忠業

二郎左衛門尉 相模守 利發 一瓢と号す  
天文元年七月一日卒す

立久

法名道登 久年寺と号す

修理亮 隆興守 母新納がじとめ  
永享四年十一月五日誕生  
文明六年四月一日卒 四十二歳  
法名玄忠 道号節山 持守寺と号す

久逸

式部右補 内守 始の名久俊  
法名法瑞 蓮公 善勝寺と号す



善久

又四郎

法名越山

忠良の實父なり早世

多宝寺と号す

勝久

遠江寺

清久

伊豫守

守棟

福昌寺住持  
桂山大和尚

忠弘

若狭守

頼久

横津守

湖月和尚

廣濟寺住持

天祐和尚

福昌寺住持

右馬頭



女子七人

忠昌

修理亮

隆奥守

始の名は茂久

寛正四年五月三日 誕生

永正五年二月十日卒 年十六歳

法名源隆道号圓室 奥守と号す

母は奈良原助八と詔をさしついで死

りてしる

忠治

又三郎

延徳元年正月十七日誕生

母は大友政親の女なり

永正十二年八月二十五日卒 二十

七歳 法名蘭窓 津友守と号す

忠隆

又六郎



明應六年 誕生 母 忠治 子 同  
永正十六年 四月 四日 卒 二十三歳  
法名 眞岳 隆盛院 と号す

勝久

又八郎 八郎 在 志兼 修理 右 史  
始乃名 志兼  
文龜三年 八月 十一日 誕生 母 忠治 子 同

忠良

三郎 在 志兼 相模 守  
別嬖 して 日新 也 号す  
明應元年 誕生  
此と 多 海 賢 乱 して 志兼 家 此 威 揚  
之 所 也 志兼 志良 粉 骨 と 号す  
其 氏 名 を ん げ ま して 家 と 眞 也 号す  
その 先 伊 地 の 城 を せ ぬ け して ます  
永 吉 日 置 伊 集 院 如 世 田 と 号す  
げ く 膳 下 り 属 せ じ ち 外 悪 逆 乃



凶徒等とくも退教を待とひて  
忠良が武切のいふらんわなこれ  
りよりて貴久つるふ教子にこれを  
とげ美紙あく二じび守護職と  
て國家無事なわ

永禄十一年十二月十三日卒 七十七歳  
法名常洞 土家菩薩と称す  
梅岳寺と号す 又日新寺と号す

貴久

三郎左衛門尉 修理左衛門 没位下  
陸奥守 判鑿して 伯國斎と号す

永正十一年五月五日誕生

母薩摩守重久の女なり

勝久嫡子なりりより守護職と貴久

ゆづぬとつへやも國家に乱れおこぬゆ

り勝久こまをくあく堅約とむる也



貴久とよりみをくらこ逢りより  
貴久も心をきよめんがしあき法のまら  
をきよめ合我のしりりこもをめぐり  
てあまこ此逢臣と誅して揚利を得  
こ此とあ薩摩大隅日向三ヶ國乃  
勇士等旗下に歸服して二つびも後  
祿とあて其切の大なる事ゆゑに  
鳴津家此中真ならわ  
元龜二年六月二十二日卒 五十八歳

忠將

法名良等 大中菴主 南林寺と号す

右馬頭 母貴久よりおぼ

兄貴久が名代やして隅川の一揆を

うら 時廻陣よおわく我死 永禄四年七月十二日

以久

又甲郎 右馬頭

忠將死しはゆり貴久義久等



以久をわしきまきくまどりと志す  
しん

天正六年十一月義久豊後の大友

也日別高城の戦い敵揚よのぶらに

以久がけり敵陣よりけ入と志す

これをうけり敵敗れ此と志す

合戦り清津一旗のころと志す以久が

軍切をせんと志す  
以久のりく

東照大権現とお祈りしてまつらん

とて家よおとしり取れ肩衝を

射せせり清津肩衝と志す

そと長年義久家久が祈り

よりして以久  
大権現とお祈りしてまつらん日別

那珂郡作古原よりおわく三万

石の地と以久よしゆり家以久忠惠

のりしり事とお祈り



女子

同十五年丹波藤山清善法とて  
めんがしありと海より伏見まで  
病死 法名照登宗恕  
高月院也号と

歎久

又四郎 右邊村  
高麗陣にて死去

重時

法名慈雲 道号とらふ

又六 入来院重豊が養子  
又長五平関ヶ原あはく討死  
法名定曉 道号 雲菴

忠興

右馬頭

十二歳あはく作入りあはく  
なつあはく駿府入りおひま



大権現入り湯（とら）にそまわりそれより  
江戸入りしり

右徳院殿とありしそまわりそれより  
しり湯いし海とそまわりて歸（かへ）む

元和四年十二月二十日

右徳院殿の命（のみこと）より長五位下（ながいゑのした）に叙（おとせ）

寛永二年九月二條の城（じょう）（ひきき）

のしり

お軍家沙（さ）びひ（ひ）ひ（ひ）て湯（ゆ）茶（ち）肉（にく）刻（き）

忠貞（ちゅうてん）信（しん）を（を）ん

同十甲子六月十一日江戸よりわかく  
病死（びやうじ） 法名宗卷（しゆんまき） 原隆（はらたか） 善運（ぜんうん） 院（いん）と号（ごう）す

某（たが）

弟（あに）奇（き）丸（まる）

五（ご）歳（さい）此（こゝ）と記（し）

將軍家のおのせより忠貞（ちゅうてん）のまゝ  
をきざし江戸より信（しん）と号（ごう）す



美奇丸みきまる 糸いと 細こ のの 末すえ 一ひと 冊ま と  
いい 心こころ も 沖おき 愚ぐ のの 末すえ 一ひと 冊ま を  
相あ 續つ ぐ

集あつ

翁おきな 千ち 代よ 丸まる

尚なほ 久ひさ

古ふる 書しよ 村むら 注しゆ 名な 目め 考こう 一ひと 枝え と 考こう 寸すん

忠ちゆう 長ちやう

雷らい 書しよ 頭づ 判はん 發はつ 一ひと て 紹しやう 益えき と 考こう 尺せき  
注しゆ 名な 宗しゆ 切せつ 既けつ 成じやう

忠ちゆう 倍べい

河か 内ない 守しゆ

注しゆ 名な 大だい 島しま 道みち 号ごう 免めん 翁おきな

久ひさ 元げん

下しも 野の 守しゆ

女によ 子こ 四し 人にん



義久

修理太直 没四位下 利髪一と給伯と

号一三位法下也稱と

五文二年二月九日誕生

母八条院重徳の女

しづめ滋長養前小原肝付伊東等

志だく薩州一畝をあたせしり

義久共を出してしづめを討つるを

とくは旗下り居せし

天正六年豊後の國主大友の義統を討

斃前斃後乃共八百餘を討つ日別言

城とせめしむ時義久殺す軍卒と

之のく高城をとりしむす給は

夢中よ首と得し

うり畝を龍田乃川のぬきこれ

義久が士卒これをまうてり給は捕

利をえんやいふもし義久はとて



敵陣より入りし松山とせめおらん  
これよりより飛騨の兵降参りて義久は  
席と望日大友が兵と高城の事と  
海水の多きと合戦の事と薩摩大隅  
日向三ヶ國の兵軍切としげまりて  
敵一万餘の首と得たりこれよりりて  
大友敗走す  
同十三年此表肥前國新造寺隆信  
威をを國りゆひ志づく相馬修理が

取込の地をせりゆへに馬加勢と義久  
りあふ義久弟中務の補家久は二千餘  
の兵をおうへ肥前此地原よりむし  
隆信これをまきして六万餘人を引具して  
出じし内り二月二十日家久隆信と  
雄雄をりつと隆信つかり引去りそく  
このとき家久が軍中より河上左京  
忠賢といふもの隆信なるのりく  
うら其首と得たりこれより義久威



堺入り九洲よゆよく肥前肥後を  
そ後筑前筑後なびき志しつと  
し事なり

同十五年四月を居考者大軍  
わく九洲よせあ入九洲の群古  
ひたうらからなれあひる雨を  
せし進つる命らりとそまけ  
ましく降人ともる考者それより  
しめく薩州よせあまつらと義久

志むく我てほし和をこし考者これを  
ゆふうれゆ義久を領を知事と得  
そり志れども薩州のしら出水高城二  
郡陽州のしら加治本目州のしらの郡縣  
あまし考者これを領して義久入り  
しら六月考者海路し海し  
義久救度と為して考者入りしり或大  
坂りしり或豊楽し作して救年と  
るくのら掃州能瀬郡よとて五千石芽



野村より千八百石播別堅徳の庄より  
三子二百石すべし一万余石の未地を給り  
義久殿樂りおわくあつたは館舎と  
おまへく居候と平生和号とそし  
いり左京のりさい近洛岡白前久公  
りつづく古今和号集と傳受と其後  
を洛殿りおわく奇れまありしに  
奇道祝とよむと義久の詠奇巻袖  
やまら

世とむりくまのれが神とまの系れ  
道一れがひをあらぬを給らん  
又連次の家道延巴宅りおわく義久  
吾句

栞より志の志と花りあふらぬ  
享長十六年正月二十二日卒七十九歳  
法名お忠と号 貴麗妙谷寺と号と  
台法院殿義久の死に奉とさつ安し海に  
て揖安と右越村と薩摩りはし



子由の具よりひやして銀子一両あり

女子二人

義弘

始の名は忠平 母は義久の四郎  
又四郎 共庫頭 浪五郎下 侍  
後四位下 参議 利發して惟新  
号と

天文四年七月二十三日誕生

義久子なりふりて家督と義弘より  
義弘武勇人よしとれく此より  
薩摩(歌)りせきりてに義弘甲  
胃と帯しうしうしうしうし  
のものとらとれもあましうし  
是より其武名をあはれ  
文禄元年考在朝鮮陣のとき義弘命  
をうけて子久保とあしうしうし



朝鮮乃都よせめり平安道とてつらむ  
久保儀り病のり望子唐嶋よりお  
わく率このゆり才忠恒のりて朝  
解りし

長二年義弘全羅忠清のあ道と  
つらむ泗川よりそむらす事二年  
なり秀吉薨一そ海あくのら大明  
の軍勢數十万ありて泗川の城とせし  
時義弘共泗川に在陣とほまのよづ一

義弘父子大明の將猛老爺孟老爺と  
相戦く大よこれをやぶり首三万一千七  
百余とゆり義弘が死とほまのよづ  
なり敵大よわくましく泰謀大史龍涯を  
あく和をあゝ義弘父子これをゆりて孟  
老爺が使弟渭濱と人質りとりて  
義弘が舟りのせく日なりゆり此度  
義弘が軍切りよりて大明の無き  
し事ゆりしは是よるゆりく日なり



出とくは帰朝は事を得しり  
大権現を切とせしめし海はく加賀大細言  
利家會津中納言兼勝備前中納言秀家  
安藝中納言輝元と伏見の城におわく  
おろりき海の内書と下さき津腰  
抽と津領と其と考名のとさきめ  
あげらるる所の薩列のしら出水高城  
二郡四万石大隅のしらとて一石義  
弘よき海りも義弘が武名あくり

あつくりしりあつくりし

元和五年病りり甲子一内藤清直  
射と使わして病とせし海

同年七月二十一日薨じり十八歳  
法名目貞道号松齡妙園寺と号せ  
此より家久在京せしお清いし海をた  
まりり國の海に花房の島を兼射上使と  
して十月六日薨じり出水り总津と  
十日薨じりしりてこれをさしめ



しに御書かきしる者真とたまふ  
るに御書入りいし  
惟新死する者無是北は合心  
福と家作の爲者真銀子千枚巻  
花房の島に海に射あ細下  
禱

八月廿九日 秀忠

杉平薩摩守殿

歳久

左邊右支 母義久より同  
法名良空 道号心岳

忠親

三島次郎

是は西國の事  
根白坂よりおわく戦死  
法名昌久桂山と号す



常久 とこひさ

下総守 しもとのり

法名芳春 ほうしやうしゆん

道号 だうごう

天澤 てんたく

久孝 ひさたか

彈正大弼 だんじやうだいひら

家久 いへひさ

又七郎 またしちらう

中務右補 なかつむのひだり

延治十二年此喜肥前守の侍原よりお  
かゝり龍造寺隆信と合戦し事々  
義久が豫の中ふりし事あり  
法名長策 道号梅天

豊久 とよひさ

又七郎 またしちらう

中務右補 なかつむのひだり

法名昌運 ほうしやううん

道号天谷 だうごうてんや



忠業

中務左衛門

法名好胤 貴宗

某

龜壽丸

天正四年早世

法名涼山幻生

久保

又一郎

天正元年の生

文禄元年久保秀右此命とつけく

朝鮮をうへ河内藩摩大隅日向三ヶ國

乃兵と引ぬく志どく武界あり

河内二十歳

同二年九月一日朝鮮唐島にて病死

法名慈春 道号一唯 皇徳寺と号す



又い郎

始の名は忠恒 陸奥守

薩摩守 大隅守 少将 中将

春議 泛三位 中納言

天保四年十一月七日誕生

長二年七月十日忠恒朝鮮唐

鴻ありて日本此諸将此國の爲に

なせめられ時義弘忠恒陸奥りおあて

朝鮮のつとさとうらやあれしより

考者より感状をすゆり

同日二十一日全羅忠清のあ道り

しむりふ時大明の共南原城あり

八月十三日日本此諸将南原を攻め

十五日此戦を殊なせめおれ其時

忠恒と父義弘あびよ和後在馬助

嘉明等と西郡の共とおはえんがため

北嶺に屯せしりて横あひり

て敵をうら首四百二十一と得しり是



りより考をよる感状をへ海其後  
忠恒と義弘と泗川城をまのり

同三年十月大明神朝鮮より

て泗川城をせんとして

をよるこゝを敵をあらして大軍まら

ひの兵討忠恒城門をむら法軍先づ

けをして大に敵陣とらやる敵陣

の精兵四百人すみこころれ中

先づけれものあ三人とていへく立

むし忠恒馬よりとりて自にふる一丈

字れ小右刀と携て敵のかをまらり

はれりらま首と得りりま外忠恒が手

りうけく敵殺十とらとれ忠恒も

肩より疵をうつめりるま又まらどはく

すべく忠恒が七卒をびくり我す

し不目り大の勢敷水とほし徳永

法平文城長原使節として朝鮮よ来て

大権現乃おほせのひよとのく諸将り



つげくいしく秀者すでる薨一婦の  
間日本此詔得十一月十五日より前  
すみやうに本朝の御へる御一此命  
より詔將とく見歸陣とて申り  
松浦法平馬修理大夫八村丹後守  
五浦淡路守小西持津守小坂天城守  
海部せん也志け通ども大助の共十室  
大重の御みく海陸よりせぬす  
在城中此共をすく海部と持まはす

是より引く日十八日義弘忠恒なび  
立花右近宗茂寺沢志摩守正成おあひ  
らりていしく城とすくはて城中  
のつとものを敵にうせては日本此  
争るべしとてすから軍士と引ぬく  
敵の船とせし事なびくなら敵船は  
射るは矢ののちもいせいもつる  
敵船のみをせりて敵あまごうらふ  
此はまは忠恒が共海り志つじの百餘



人出く〜〜〜ふり歌如くげ〜〜〜て城  
中七日女御御朝とふ〜〜〜を得〜〜〜り

大権現これなき〜〜〜て利家素務

秀家輝元とおけり〜〜〜ひく藤原義

の威状を下され薩摩大隅あ國の〜〜

よ〜〜〜一石の地と津領と〜〜〜其上

義弘を正宗た〜〜〜忠恒は長光の

口と津領と〜〜〜忠恒が將り〜〜〜

らぬ

同七年八月忠恒薩州〜〜〜り十月

と海〜〜〜十二月り伏見乃城〜〜

大権現一津湯と

聖多正月津湯と〜〜〜海り沙馬津

と為領〜〜〜て帰ふと

同十一年九月一日忠恒伏見〜〜〜りありて

大権現

名津院殿にお湯と〜〜〜り杉平氏〜〜〜り

沙津の家〜〜〜と〜〜〜りて家〜〜〜



号はゆゑに家名を承りしなり

琉球國じりしりし津り属は事

毛し志りぬる事未貞せと家久母

三人をほりて此事としりぬる事

あへく兼引せぬすれしりぬる事

大権現一言としてあれをうん事とし

くもばれしりしりしりしりしりし

同十四年其妻家久松山美濃守

久言と大将や平田を即ち其村

を副将やして三千人の軍卒としりぬ

共如二百余艘二月十一日よもつる事

琉球を向へ大船を志く其より津

あししりしりしりしりしりしりし

りしりしりしりしりしりしりし

そち其餘黨を降人となり四月一日那

津よしりしりしりしりしりしりし

くさりと津よしりしりしりしりし

他の津より志岸して相残事三日



とよよ騎兵は種々の死にたぬの救百人  
あり部北門は入く其城とせめあがる  
後國王と司官等みな和とあふく  
くはれ河は勝利を得る事と家久は  
ほぐ家久すあしら使をせく  
大権現より言とせしげらねる御威  
ありて是事とせしはりて此城と家久  
より下さる

五月二十又日中山王陸別りりま

同十五年五月十六日家久中山王  
づくい月六日駿府より

大権現きこうしてあまといり  
まひ八日家久は命とて中山王と登城  
せしめしは

大権現すあしら出御ありて中山王より  
對面なるは浪子百端程く皮又羅紗と  
大平布二百疋白銀一百ある刀一腰と  
約命志とくくしり清氣と杖と



そり十一日郷食應とそ海りて  
榎 頼宣 頼房 常陸 郷 所 郷 務 郷 殿

舞曲とありそ海り其るりけあ

まことそびめりて使者とそ教を志す

家久貞宗の刀脇指と汗領と

十九日御崎と海りて駿河より江戸

りて二十六日

名徳院殿とそを来とたぐこのめり海りて

と使と下うた又二十七日上使ありて八

木子儀をり海り於二十八日家久所城

のかりて長光の太刀一腰辰子百端虎の皮

中しり白銀一万あると就と又太刀一腰

一毛紅糸百斤

お軍家一献と九月二日郷食應ありて七日

り所茶とたまり於十二日家久中山王と

中も多ひく所城のかり十六日又郷食

宴と家久より海りありびし清馬と

下され楊田北在とありとありし日清い



とゆとそほりて二十日は江戸と出て  
波祖踏を履く京都よりそれあり  
國よつふするら年とあてどして  
中山王と琉球りつしし中山に  
琉球の一名なり

元和三年七月十七日家久京より  
て水城のそ幾

右徳院殿の沙執奏りより参議り  
せめたを湯中将とぬ沙赤肉の時

家久庵返と

寛永三年八月十九日家久在京の時

右徳院殿の釣命ふりて権中納言

返三位と叙とこれ日勅して察の沙る  
をそほりたる

九月六日二條乃城一行幸

將軍家沙じつみわして沙赤肉のと奇

家久騎馬とて庵返と

同七年四月十八日



將軍家久が江戸の館に渡河あり其記

いし

寛永七年<sup>のえ</sup>四月十八日卯刻

將軍家教寄屋<sup>すまや</sup>在<sup>あ</sup>鹵地<sup>ろち</sup>のより

河成<sup>かたち</sup>河<sup>か</sup>相伴<sup>あそばさ</sup>丹羽<sup>に</sup>出<sup>で</sup>高<sup>たか</sup>村<sup>むら</sup>長<sup>ちやう</sup>重<sup>しげ</sup>和<sup>わ</sup>存<sup>ぞん</sup>た<sup>た</sup>筋<sup>すぢ</sup>

嘉明<sup>かみ</sup>なり教寄屋<sup>すまや</sup>在<sup>あ</sup>古田<sup>ふるた</sup>織部<sup>おりべ</sup>重勝<sup>しげかつ</sup>拍<sup>は</sup>曲<sup>まが</sup>此<sup>こゝ</sup>

うつ三帖大目

一掛<sup>か</sup>抽<sup>ひ</sup>楚石<sup>そせき</sup>横<sup>よこ</sup>文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>

一茶<sup>ちや</sup>入<sup>いり</sup>平野<sup>ひらの</sup>肩<sup>かた</sup>衝<sup>つ</sup>東<sup>あづま</sup>山<sup>やま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>

一茶<sup>ちや</sup>碗<sup>わん</sup>高<sup>たか</sup>藥<sup>りやく</sup>三<sup>さん</sup>足<sup>あし</sup>

一茶<sup>ちや</sup>拍<sup>は</sup>利<sup>り</sup>休<sup>しゅう</sup>地<sup>ぢ</sup>

一水<sup>みづ</sup>う志<sup>し</sup>づ<sup>づ</sup>き<sup>き</sup>耳<sup>みみ</sup>あり

一花<sup>はな</sup>入<sup>いり</sup>の<sup>の</sup>筒<sup>つつ</sup>

一香<sup>かう</sup>合<sup>が</sup>瑪<sup>ま</sup>瑙<sup>なう</sup>山<sup>やま</sup>谷<sup>や</sup>と

一釜<sup>かま</sup>車<sup>くるま</sup>油<sup>あぶら</sup>

一炭<sup>たん</sup>入<sup>いり</sup>妙<sup>たう</sup>く<sup>く</sup>べ<sup>べ</sup>げん<sup>げん</sup>と<sup>と</sup>切<sup>ぎり</sup>

一棚<sup>たな</sup>環<sup>わん</sup>羽<sup>う</sup>幕<sup>まく</sup>

御花



將軍家ありしころ花にいらし川の白  
きとじしうきと出しは岩なるわ  
後の清峯

お守あすをいづまに比敷なりこ  
御うきなりき

鎖の間

一釜いあらもれ子八角くは紋あり頼朝の  
の釜のよりみつ子志いそはけり  
一茶入瀬戸肩衝但袋棚これをとく

棚の中れ重し巻を自下に水く蓋蓋  
ありあけしこのはけりる南蠻拍也  
園地裏のあのみ上壇あり書院は美  
中ふ紙をから書院のせざり一体の神  
のり此硯筆架り筆墨くつりり  
羽帚とから硯の銘東坡居士とあり  
そらうこの間

一園地裏あり釜い高麗

一棚ありとるなりつばは茶入こまのあざり



乃道具、これを畧す

一床、三幅一對の墨繪、中、布袋贄

寧退耕、亦、此、脇、朝陽對、月、焚、痴、絶

掛繪の、前、大机あり、机乃、去、中、

荷、系、將軍、此、こ、ゆり、胡、銅、の

香、魁、あり

一、沙、菜、こ、く、鎖、の、間、一、出、御、あり、

色、と、も、沙、境、あり、れ、と、進、り、寢、殿、

な、を、し、り、

御寢殿の、か、り、粗、あ、ま、を、記、す

一、沙、寢、殿、と、壇、の、床、二、幅、一、對、を、か、り、

左、右、の、虎、揚、月、洞、篋、なり、こ、前、

花、瓶、二、つ、あり、花、池、の、坊、こ、れ、を、し、り、

花、の、心、左、右、の、竹、なり

一、床、の、お、よ、と、こ、名、金、經、瓶、子、二、重、の、ご、も

ま、ま、し、り、沙、座、疊、二、で、り、あ、く、其、上

り、錦、の、沙、蒲、團、あり、沙、座、の、右、れ、こ、

沙、手、け、た、の、脇、沙、弓、は、籠、征、夫、二十



又さくらとびらつして弦を叩くものありとく  
 けの内竹と清およしけくあまきとつり  
 するも次り竹鑑のうらうらの蓋はう  
 けぞ疊のくしよ先とをく清甲とよま  
 がこれ上よとく舊記のくく家光伊勢  
 長部が猫貞昌これをかぶる玉馬玉經三重  
 瓶子大草流とゆいこれなうたよ  
 これ度ありあらく式三献を調き  
 なる清相律の家久あり

一回床のたれ服よ三重た遠棚あり此  
 棚よ整天目をよすゆふ水瓶紫銅の  
 鴨の香爐曲痛の食箸盆り所々硯石  
 骨吐一對清同朋福の鉢これとあぶら  
 一回書院の床よ青磁の岩ぐく此硯屏  
 硯あり丸山八海の巻架あ痛の袖乃  
 筆古銅の牛た墨留古銅の棟の以入  
 菊洗のり盆石と墨塗此鉢りよゆり  
 下籠と曲痛の盆よすゆら書院のく



り釣番炬燵は拂子いづ道と清田朋福は銀  
乞とつぐれ

一 沖細戸のうらゝ硯文巻とをき

一 二此清座敷の次乃間は海鏡の巻子これあり  
風炮釜基と自榮入水うし蓋をま

柄杓とて水建いづ道と黄金なり

袴はゆきあまをり

一 け次の間あるのふ十二合れおとつぐら  
盛柄さくそくこれあり式三献七五三十二

合れおつぐらと天野番書これをつぐら

御寝殿りおわく洋領物

一 御右の一振 正恒 御脇指一腰 正宗

御小袖 百 御袴 二百

御衣箱 二十 唐織 越前綿 千把

銀子 三千枚

中納言これをお領と

一 御腰物 春田光 御袴 百 銀子 五百枚

又二郎これをお領と



一 沓脇指一腰 沓袴 五十 銀子 二百枚

又十郎こまきと沓領

一 沓脇指一腰 沓袴 二十 銀子 二百枚

越後守これをお給

沓履殿よりおあはくは物

一 御右の一腰 沓脇指一腰 貞宗

中細言こまきと進上

一 沓脇指一腰 西宗

又十郎これを進上

沓會取のつづり粗これを志る

一 上櫃の床に二幅一對とつづり中王右軍

珍眼差替これあり左伯牙子期右阮咸

荀勗これ王暉筆前二具足と卓入り

とゆれ卓れあのみ死は久花瓶花

池の坊こまきとそりるらねたり

一 床の脇上櫃遠棚あり甚天目茶入

肩衝也痛の盆はすゆれ喜貝の食鉢

也痛の盆はすゆれ越巻と巻唐沉箱



食器の痛の盆に居る書物あり石葛と  
青磁の鉢とと砂の瓶とあり

一書院のうへは煥鏡をけりた右の柱に

大鏡とととから下に硯屏硯籠乃

巻架牛は墨由文鏡右銅の水入書磁

の筆洗けえん一對下籠袖の物盆石銘

る雷舟鉢はうもれもの青磁の花入りけ

花あり右いつまも福の鉢これをおがれ

一此書院におるく様架洗鏡と蓋欄乃

志と鉢あり上煙の廣縁は墨と一あて

巻子とをく風爐釜あり水一海一蓋

蓋柄拍とと下留銀なり鉢の鉢是と

一書會取四の間乃大床は四幅一對と

鏡は四季は系氣賢い微明鏡あり中央の

卓はと瑪瑙の大香爐は書物をとれた

右は年花籠一對と花あり心は花籠を

と本は札は居は四幅一對のとと花籠

二籠とと車馬記のふ



一 沙老中流の府ありけ物達磨竹心

香と盆入りと

一 左の遠棚鴨の香燵の物なり又

香燵香合を盆入り居る食糞硯箱料紙

箱あり

一 沙老一沙成まへは沙巻と巻つけ

上煙と廣間のる此障子とこりし

沙府のまへより廣るの紙をけりて

をとりと

一腰 黒一文字

沙老日

沙小袖

沙裕

紅糸

黄金

生糸

沙馬

百 百

二百斤

二百枚

千斤

一疋

麻毛紐置貞誠作

沙別苗本村疎一郎 (津津下野)

こまとり



右ハ中納言ノ礼ヲ献ス

御右刀

一腰 信國

御馬

一疋 鶴毛

御別當本村孫ハ郎 (海津彈正)

これを口

御袴

二十

銀子

二百枚

右ハ又云郎ニ進メテ献ス

御右刀

一腰 糸

御馬代

銀子 二百枚

御袴

十

右ハ又十郎ニ進メテ献ス

御右刀

一腰 糸

御馬代

銀子 百枚

御袴

十

右ハ越後守ニ進メテ献ス

一家中此御礼ニ由ルテ御礼ノ上ニ次弟

海津彈正大弼



鳴津相模守  
鳴津豊後守  
佐多丹波守  
榎山采女正  
北郷出雲守  
北郷佐渡守  
頼姓長尾新  
入米院石見守  
種子鳴丸を去支

右銘く小沙右日沙裕これを進上

將軍家より家中此者一洋領物

沙裕十銀子百枚 鳴津彈正大弼  
沙裕十銀子百枚 鳴津相模守  
沙裕十銀子百枚 鳴津豊後守  
沙裕十銀子百枚 佐多丹波守  
沙裕十銀子百枚 榎山采女正



沖裕十銀子 百枚

北郷 出雲守

沖裕十銀子 六十枚

水郷 作渡守

沖裕十銀子 五十枚

頼娃 長左衛門尉

沖裕十銀子 五十枚

入来 院石見守

沖裕十銀子 五十枚

裕子 徳左衛門尉

沖裕十銀子 二百枚

嶋津 下野守

沖裕十銀子 二百枚

伊藤 孝郎の浦

一者 沖裕お餅て 沖裕お餅つて 進上物皆くわまへのけりあひこの際子

をそとて居て 徳東くまのけりあひこの際子  
酒井 雅系 領忠 世 孫 彦 一 行て 幕 此  
外より 沖裕くまのけりあひこの際子  
大吏まのり 由 此 家 あり 沖裕くまのけりあひこの際子  
やいへともいへみ 終ありて 以と八 為なり

翁 親世太史

高砂 親世太史

清経 忠右衛門

源氏 信重 七太史

天敏 忠右衛門

黒塚 今太史

楊川 七太史

玉繁 忠右衛門



呉服 親世史

一 襦ふ三番のつて 舞臺 (要脚 五万七千  
 也とつて 親世 今春 金剛 保昌 七丈 丈一  
 唐織 縫落 三つ 丈一 丈一 丈一 丈一 丈一  
 役者 地福 まで 二百人 小袖 三つ 丈一  
 一 此と此 沓着 とおろされ 沓履殿 (かろ  
 せし 丈七 五二 の 沓履 とまのり 沓易 此  
 沓履 まで 缺也  
 一 今度 沓成 につき 琉球 より 楽人 数人

めしよのふらふらふ 黒道 十四歳

真志金 十四歳 里次郎 十六歳

江洲之里主 十六歳 大里 十七歳

いづまを 英齋の 童子 たり 沓履殿  
 おろく 沓履 まで のり 履く 樂を 作付  
 らぬ 西遊 乗志 せん 志 せん 志 せん 志 せん  
 子 記 こと こと 鉦 太鼓 まで こと こと 樂と 奏し 法  
 度 奏の 儀 具を せし ほど 沓 扱 壇 なる  
 めしよの 日本に おろく 履く こと とき



の異國人の樂もたにめつ〜くもが

めもめれよりなり

一哲く御体息なされ居て又は會取

沙成ありて沙簾あり様ふ沙鏡

より此祝云々く還御なり

一沙湯敷の床に刺子此棚沙巾中け

ゆといづき沙櫛箱九重此香合沙香

炉上壇り錦此沙蒲團沙腰物け

これをとくいつ進と伊勢兵部少輔

あまきとがぶれ

一沙寝敷のうらり沙鏡一領白糸の物起

金沙甲一ころ袖沙くそ物起金沙ら

一張重着沙鉾矢一腰服金銀矢殺二十

五還沙の後ろりく進と進とと

以上

名徳院敷沙成同日四月二十一日卯の刻沙

殺高在并沙在妻のめより等

將軍家沙成のとまきよ同く沙殺高在は



供丹羽島に濱口射加殿に馬助清會席  
と同前なり

一 沖花あそけう花に柄糸多此百合

出ー了は鉄線花なり

一 清の沖炭あそげう花いづ道と比類

一 連方に居るまやま

一 清寢殿(清成此とき式三献あるやう)

清會所(清成

清領物

沖右刀

一振 長光

沖刀

一腰 正宗

沖小袖

百

沖袴

百

八丈絹

二百端

銀子

二千枚

右中納言清領物

沖右刀

一振

沖刀

一腰 吉家



御袴 あしを 五十

銀子 五百枚

右ハ又三郎ニ進上物領也

御腰指 こしご 一腰 貞宗

御袴 二十

銀子 二百枚

右ハ又十郎ニ進上物領也

御腰指 一腰 貞宗

御袴 十

銀子 二百枚

右ハ越後守ニ進上物領也

進上物

御右刀 一振 包平

御刀 一腰 貞宗

御腰指 一腰 貞宗

御小袖 百

御袴 百

白糸 千斤



狸く皮いぬくひ

二十にじゅう 尺せき

黄金おうごん

二百枚にひゃくまい

御馬ごま

一疋いっぺい

東毛越前屋貞常作  
鐘同作

沙别さべつ 源次郎げんじらう 一いつ 津下野守つげのしゅ

一疋をわつとせ

右中納言みぎなかつなごん これを進上これをおしあげ

御右刀ごみぎやう

一振いっぴん

助平

沙刀さやう

一腰いっせう

國後

御裕ごよ

二十

右又三郎みぎまたさんらう これを進上これをおしあげ

銀子ぎんこ

二百枚

御太刀ごたう

一腰

御裕ごよ

十

銀子ぎんこ

百枚

右又十郎みぎまたじゅうらう これを進上これをおしあげ

御右刀ごみぎやう

一腰

御裕ごよ

十

銀子ぎんこ

百枚



右に越後守これを進らむ

家来けらいの者もの（津領ついで地ぢ）

銀子ぎんす二百枚

銀子二百枚

銀子百枚

銀子百枚

銀子百枚

銀子百枚

銀子六十枚

津下野守つげのり

伊勢若部いせわくべの捕とら

津津つづ彈正だんしょう大弼だいしゅう

津津相模守つづさげのり

津津豊後守つづぶんごのり

北郷出雲守きたごういづものり

依多丹波よたたんば

銀子六十枚

銀子六十枚

銀子六十枚

銀子六十枚

銀子六十枚

一家いけ来らい北きた若わ津つ礼れい申まをとと若わ申まをのの儀ぎをを十八日

將軍家津成の因の〜を〜と物と目取也

一沙會取（津成）つぎと津礼お取く後

格うらぐふ〜〜まは 津つ前まへより酒井河波さらいのしほ

入彦院石見守ひこひこいしみのり

榊山宋女さかやまのむすめ正ただ

北郷作渡守きたごうわたりのり

額娃ぬか長ながた基もとの村むら

稻子いなこ橋はしたを太ふと史し











を江戸へ送りて十月二十三日弾正な  
らびに伊場若部等とて行くに土井  
大炊頭利勝酒井横波守忠勝は若く  
先久の國とていづん事と書とて十  
一月二十二日新左右と使わして  
慶徳はまり病をこりめ露一羽を  
始すてふして右を御返よむとて  
同十八年正月十二日阿部豊後守  
釣命とのづくいしく肥前馬の増

起のものとていづん事と書とて十  
月二十二日新左右と使わして  
慶徳はまり病をこりめ露一羽を  
始すてふして右を御返よむとて  
同十八年正月十二日阿部豊後守  
釣命とのづくいしく肥前馬の増



て新療しんりょうとにもある一ありとある夕ゆふ  
 ほろ光久みつひさの若くいしく忠ちゅうにおこる  
 事ありし惠けいとある事なりしつとんで  
 家督けとくとほぐありといひとりて薨こうと付  
 了仲妻ちゆうむら二十二日享年六十三 法名花心  
 道号翠月慈眼院と号と  
 光久みつひさのひよなえびつて食くをせむる  
 奉三日なりありのうらひもあつて  
 あいをほくそ

上使能辨じょうしにのせの小十郎江戸より薩摩さつまの下向げかう  
 志くおほせのひよとのへ銀子ぎんす五百枚まいを  
 子由こゆに光久みつひさに謝あやましていまさ喪もとなす  
 光久みつひさ四月二十日江戸より  
 二十七日河部かべを命いのちと受けきゆ  
 して光久みつひさをめつと進すす去さ井い大炊おほい館かん  
 ありししつ時とき秋山あきやま修理しゆり亮りやう井いと後ご守しゅ家け  
 をつとく光久みつひさが家臣けしん河津かづ弾だん正せい大だい強かう  
 河津かづ下野げの守しゅ伊い堀ほり兵へい部ぶの捕とら縛ばく回かい出しゅ也なり



等とは館にありて大炊頭 上意のしよ  
そのべくいとく亡父家久がらり取の  
分國光久の子はゆり光久恩榮は  
トり好さ事と殊して五月十三日  
宅城一是と謝一こそまつり國の  
のたかなるびる金帛ふと献トく  
お湯とまはらふ退出せんとすの謝  
清和らくめさきて家久が六十餘とて  
身まかり一とおいこむがりのとよの

とこ也又才治は又節忠平治津下野の治は  
弾正大弼あつびは伊勢若部が備貞昌鑑田出雲守  
頼娃長尾為尉喜入休右為尉新納右衛門佐  
相良重助等とやしてゆりははなん  
ら〜は〜志んく光久をとりてよく  
其國とまのりは〜一各お供してさる

某

萬千代丸



延享十六年出水場よりおのゝく逝去  
湖月宗江にたづ

忠清

久甲郎

文禄四年逝去

榮桂純香と号す

女子二人

某

兵庫頭

延享十七年十二月九日誕生  
同十九年正月二十日死去

女子

延享十八年生母元久より同  
元和元年三月廿八日死

女子

延享十九年二月三日生  
寛永九年三月八日死 十九歳







従五位下小叙せしむ此より

右徳院殿よりた文字此沖服指と家久

之は

將軍家より光包の沖服指とあり又

右徳院殿より守家の口と光久お給

右家よりた文字此口と沖服指と又

右徳院殿より因綱の口と式部大納言より下

之は

將軍家より包永此口と下より又

右徳院殿より長光此口と玄蕃頭より下

右家より元重の口と下より

けし家久父子恩と謝せん

より進上あり

太口 包永 銀子 三百枚

衣服 二十領

將軍家一光久より進上あり

右口 因志 銀子 三百枚

衣服 二十領



台徳院殿一を以

右に并銀子二百枚衣服十領

將軍家一家久秋也

太刀あびる銀子二百枚衣服十領

台徳院殿一としてまつる式部左衛門尉又

同く右に并銀子百枚衣服十領とす

台徳院殿

將軍家と伴請也

寛永十五年此夏

將軍家の作より家久が遺詔と光久より  
下すべく家督とほくは薩摩入隅のあ  
國をびる日向の郡縣琉球國みかると  
の事家久が譜の中より

志平

又一郎

兵庫頭

元和二年十一月七日生

久重

北卿又十郎

式部左衛門



元和三年十一月二十六日生侍  
 母光久（光久の御子）北御出守の猶子  
 寛永八年四月二十一日光久元服の時  
 久直式部を補り何れに位下り  
 叙と授けり  
 將軍家より國細の寶刀と洋領一  
 台徳院殿より包永（包永の寶刀）とね銀（ね銀）と久直  
 と又右刀（右刀）とびよ白銀百枚（白銀百枚）と呉服（呉服）と  
 して其恩光とありとてまつる

女子

寛永十八年十一月六日卒二十五歳

元和四年九月十二日生侍

寛永十四年二月二十四日死二十歳

女子

元和五年十一月廿日生侍

寛永十一年八月十八日死十六歳

女子

元和六年六月十八日生侍 母光久（光久の御子）



津大和守が妻

忠弘

東市正

元和六年十二月十一日生

義弘が嫡女の猶子

忠共

町田出羽守

元和七年二月二日武州江戸にて生

町田尚書頭猶子

忠紀

越後守

玄蕃頭

元和八年二月十九日生母元久の同

津又四郎猶子

寛永八年四月二十一日元久元服の時忠紀

玄蕃頭は位下り叙の時

將軍家より長光の寶刀とお給

名徳陰教より元重此寶刀と津領と忠紀も

又厚恩を謝せんがふたなりびり



白銀千あ兵服おと秋ど

重永

根江七郎

元和八年七月廿日生侍根江七郎の猶子

久雄

安藤玄守

元和八年八月十一日生侍安藤玄守の猶子

女子

寛永九年九月十六日生侍安藤玄守の妻

女子

寛永二年七月二日生侍光久一服肝付伊三郎の妻

改由

鎌田又七郎

寛永二年六月十二日生侍鎌田又七郎の猶子

女子

寛永二年十一月十六日生侍日下一とて死

女子

寛永二年七月十八日生侍清津中務の妻



忠良

伊集院右衛門佐

寛永三年十一月二十六日生伊集院右衛門

頼子

忠隆

桂又十郎

寛永四年五月二十五日生桂山城の頼子

久五

伊集院源女

貞昭

頼子

寛永四年十二月十八日生伊集院右衛門の

伊集院人正

寛永六年五月十四日武州江戸に生

伊集院右衛門の頼子

久尚

松山又九郎

寛永六年七月四日生松山助左衛門の頼子



女子

寛永八年正月六日生母ありて歿す

女子

寛永九年五月十二日生母ありて歿す

女子

寛永十年三月十二日生母ありて歿す

女子

寛永十一年二月二十四日生母ありて歿す

女子

寛永十二年十月十八日生母ありて歿す

某

席巻丸

寛永九年四月一日武則江戸にて生母ありて歿す

母ハ伊勢大隅守がじとあり

女子

寛永十一年六月十六日武則江戸にて生母ありて歿す

母ハ虎巻丸より同



家紋十文字

志久しひさト小こ洋やうなり



